

漢文の授業について

——入門から文学・思想の講読まで

伊 藤 直 哉

キーワード：漢文、国語、中国語

1. はじめに

本稿は、桜美林大学リベラルアーツ学群における漢文の授業の報告である。本学において、入門から始まる漢文の授業は「中国文言文講読」「中国古典文学史」「中国古代思想研究」「中国文学概論」の4つである。履修者は平均すると20名前後、決して多い人数とは言えない。しかし、その少数の学生たちに満足してもらえるような授業を行うよう心がけている。

学生は教職を取りたい者と、教職には関係なくシラバスを見て興味を覚えた者の2種類に分かれている。さて「中国文言文講読」「中国古代思想研究」は、国語の教科に関する科目である。「中国文学概論」「中国古典文学史」の方は、中国語の教科に関する科目である。なぜ漢文の授業が中国語に関係するのかわからないという人もいるだろうが、本稿を最後まで読めば納得してもらえると思う。なお、参考文献は末尾に一括して記した。

ところで副題にある入門の2字について、違和感を覚えた人もいると思う。なぜなら漢文は高校の国語で必修だから、高校を卒業した者ならば、わざわざ大学で入門から学び直す必要はない、と思えるだろうからである。しかし、それはあくまでも「高校の学習内容が全て頭に入っている」という理想的状態であって、現実の学生の状況とは違っている。

学生たちに、初回の授業で「孟子、李白、杜甫」などの言葉を示してみると、たいてい「読めません」という答えが返ってくる。（さすがに孔子は読めるが。）また、レ点・一二点などの返り点の用法を聞いても「分かりません」と答える者がほとんどである。つまり、漢文については全くの初心者が授業を受けるわけである。

学生のレベルが上述の通りだというのは、「教える気力を^な萎えさせる」のに十分であろう。しかし、一面では「未知の知識に触れる授業ができる」ということにもなる。ある物事をどう評価するかは、まさしく「物は考えよう」である。コップに水が一滴も入っていない状態を「水が全然ない」と嘆くか、それとも「たっぷり水を入れる余裕がある」と前向きに考えるか、本当に「物は考えよう」である。

2. 漢文とは？

授業でまず考えさせるのは「漢文とは何か？」という問題である。漢文とは、言い換えれば、中国の古文なのである。では、どの国の言葉で書かれているのだろうか。それはもちろん、中国語である。(現代中国語ではないが。)すなわち、漢文を学ぶことは古典中国語を学ぶことになる。よって漢文学習は、外国語学習の一環と言えるのである。このことは、ふつうの漢文参考書では、ほとんど強調されていない。

授業では、日本人が書いた漢詩・漢文(日本漢詩文)も紹介する。しかし、日本人が書いたものとは言っても、中国の古文の文法・語彙に基づいて書かれたものだから、やはり中国語の一部と言える。この点については、英語を参考にすると分かりやすいであろう。日本人が英文法に従って書いた文章も、立派に英語と言えるのである。

さて漢文は、日本の文化に巨大な影響を与えてきた。あまりに巨大すぎるから、ふつうは見えにくい。まず学生に対して、漢字がないと日本語は書けないということを強調しておく。漢字とは何か？漢字を英語に訳せばChinese character、つまり中国の文字、中国語の文字である。本来は中国語を書き表すための文字を、日本語は借用しているわけである。それから、カナ文字も漢字に由来する。例を挙げれば、加をくずし字にしたものがか、加の一部を取ったものがカである。そういう知識は、大きめの国語辞典でかを引くと得られることを教えている。

日本語の表記は、本来は中国語を書き表すための漢字と、漢字を変形させたカナ文字から成り立っている。つまり漢字がなければ日本語は書けない、よって日本文化もありえないということになる。影響の巨大さが分かるというものである。

表記法だけではなく、語彙の面でも影響は大きい。日本語の語彙の中では、漢語が大きな割合を占めているが、これは中国の古文から借用したものである。だから国語学の書物では、漢語は外来語であると明記しているものもある。

そうすると、ふだんの生活で常用されている「登山、飲酒、握手、無人、入門」などなどの数多くの言葉は、「実は漢文である」とも言えるのである。極めて短い漢文ではあるが、やはり漢文である。つまり日本語を使えるということは、「ある程度は漢文を知っている」ことにもなる。この事実を知るならば、漢文に対する心理的距離感は、かなり縮小しうらと思う。

3. 読み方

漢文の読み方は、もちろん日本式の訓読^{くんどく}で教える。(訓読の本質については後述。)しかし時には、中国語による読み方も紹介する。それは、漢文が本来は中国語であることを絶えず意識させるためである。受講生のうち中国語を履修した者の割合は少ないので、学生に中国語で読むことは求めていない。ただ、「中国語ができる人は、中国語でも読んでほ

しい」と呼びかけている。また未履修者に対しては、「1科目でもいいから中国語を履修してみては？」と勧めている。

ところで、ここで言う「中国語」であるが、それは北京語を指す。なぜ時には北京語で音読するのかというと、筆者が発音できる中国語が北京語だけだからである。それが一番の理由である。

もちろん、作品が書かれた時代の音で読むのが一番いいのは分かっている。しかし、昔の音を復元するのは困難であり、様々の学説が存在する。とりわけ調値ちようちには不明の点が多い。調値とは簡単に言えば、声調（1音節の中における音の高さの変動）の、実際の姿である。それから、作者の出身地による方言の違いも考慮しなければならない。そういう特定の時代・地域の発音を完全に復元するのは、まさしく不可能と言える難事である。それゆえ代用として北京語で発音するのは、一つの方策と言えるだろう。

ならば、いっそのこと「日本の漢字音で漢文を直読すればいいではないか」という意見も出てこようが、それは問題が大きい。第一に日本漢字音では、しばしば1文字が2音節になる。中国語では、漢字1文字が1音節なのであるが。第二に、日本漢字音には声調が存在しない。つまり、(原文における)声調が交錯する美を味わうことができない。そういう点から考えると、やはり北京語で発音するのが「より良い」方法だと言えるだろう。

以上書いたことは、授業中に学生に話すわけではない。無用の混乱を招きかねないと思うからである。ただ、教える側の心づもりとしては、そういう知識を念頭に置いた方がいいと思う。

4. 訓読とは？

たとえば杜甫の詩「春望」しゅんぼうの第1句「国破山河在 (A)」を、訓読では「国破れて山河在り (B)」と読む。(A)は中国の古文、つまり中国語である。では、(B)の方は何語で書かれているのだろうか？ それは言うまでもなく日本語である。(日本語の古文であって、現代の日本語ではないが。)

さて(A)を(B)に直訳すること、これが訓読であって、中国の古文を日本の古文に直訳することである。だから訓読は、外国語学習の一環と言える。なぜならば、翻訳は外国語学習の重要な項目だからである。このことは専門家でも往々にして看過しがちである。たとえば、ある漢文の先生の集まりで筆者が「漢文の授業は、外国語学習の一環である」と述べたところ、奇異な表情をされたことがあった。

ここで付け加えておくと、少数ながら、訓読を訳文と称している例もある。たとえば中国文学研究の泰斗・吉川幸次郎氏は、自作の漢詩集の訓読を訳文と記している。(参考：『吉川幸次郎全集』第二十巻、筑摩書房、1975年)

さて前に、極めて短い漢文の例として挙げた「登山、飲酒、握手、無人、入門」であるが、それらを訓読すると「山に登る、酒を飲む、手を握る、人無し、門に入る」となる。

こうしてみると訓読（古文への直訳）には、現代語と同じ言い方になる場合が結構あることに気づく。これは「現代語の中には、古文が含まれている」ということである。現代語は、最近になって突然「降って湧いた」のではなく古文の土台の上に形作られたものだから、当然といえば当然の話である。

それから「若^き指導者」という言い方、これも古文である。現代語では「若^い指導者」となる。しかし「若^き指導者」の方が、より重厚で格好良い感じがする。そういう雰囲気を出したい時には、今でも古文を使うわけである。

以上のような例を紹介しながら、古文への心理的距離感を解消する一助としている。

5. 返り点・送り仮名・口語訳

訓読する場合には、原文（中国の古文）に返り点や送り仮名を付けて読むわけだが、教材プリントには、返り点・送り仮名を付けていない。なぜかと言えば、絶えず原文を意識させたいからである。筆者自身の経験で言えば、高校で漢文を習った時に、教科書に返り点・送り仮名が付いているので、「漢文とは、そういうものだ」と思い込んでいた。原文を意識することは、ほとんどなかった。そういう経験からしても、教材で原文を示すことには意義があると考えている。

教材プリントに「傍若無人」とある場合は、漢字1字を「○」で板書し、4文字だから「○○○○」と記し、そこに返り点・送り仮名を施す。それから返り点の用法を教える。そして「傍^{かたわ}らに人無^{こと}きが若^{ごと}し」と読むことを教える。このように訓読した通りに書いた文を、書き下し文ということも教える。

次には口語訳を示す。「傍^{かたわ}らに人無^{こと}きが若^{ごと}し」だから「そばに他人がいないようだ」と口語訳できることを教える。そして、日本語の「傍若無人な振る舞い」は「そばに他人がいないかのように、勝手に振る舞うこと」の意味になることを示す。学生が使える語彙を増やすための一助にしたいためである。

時には次のような小話を入れたりする。——漢文で「若」には「若い」という意味はない。従って「若鮎」という言葉は、漢文ならば「鮎^{なます}の若^{ごと}し（ナマズみたいだ）」という意味になる。そんな小話も入れながら、授業の活性化を図っている。

ところで訓読（および書き下し文）は、日本の古文への直訳なのであるが、「傍^{かたわ}らに人無^{こと}きが若^{ごと}し」や「国破れて山河在り」といった例からも感じ取れるように、独特の格調があると言える。たぶんそれが1つの理由となって、かつて和漢混交文が盛行したものである。和漢混交文は、書き下し文から生まれた文体であり、13世紀から20世紀初めにかけて日本語の重要な文体であった。要するに漢文は、日本の古文に近づくための良き道筋とも言えるわけである。

6. 文学・思想の講読

授業の最初の1～2回を使って上述のような話をしたあとで、3回目あたりからは講読に入っていく。授業のやり方は、学生が教材プリントの原文を見ながら、教師が漢字1字を○で表し「○○○○……」と板書して返り点・送り仮名を付けた読み方に従って、1人ずつ読んでいく形を取っている。返り点の用法などで未習のものが出てきた時は、その都度読み方を教える。訓読を終えたら、口語訳を示す。

また復習に力を入れている。毎回の授業では、まず前回に習った訓読・口語訳を学生1人ずつに言わせる。分からない場合は、「隣り近所の人と相談してもいい」としている。分からないことについて学生が教えあって答えるのも、1つの積極的な学習方法だと考えるからである。それでも答えられない場合は、チェックしておく。チェック回数が多いと評価に影響することを、あらかじめ学生に伝達している。

以下に講読の例をいくつか挙げていこう。まずは『詩経』の「文王」という詩の1節である。文王は古代の周の国の王で、紀元前11世紀に文王の息子の武王が、殷王朝を倒して天下を取ったのであった。

(原文)

文王在上、於昭于天。周雖旧邦、其命維新。

(書き下し文)

文王 上に在り、於天に昭かなり。周は旧邦なりと雖も、其の命は維新たり。

(口語訳)

文王の魂は上にあり、ああ天で輝いている。周は古い国だけど、新たに天命が下った。

訓読・口語訳を教えてから、以下のようなコメントを付け加える。このコメントについても「次回の授業で、概略を言ってもらおう」と指示している。

「文王」は周の天下統一を称えた歌であり、周の先祖である文王の魂が、天の上から周の国を見守っていることを歌っている。それから周の国に、新たな天命（～～殷に代わって天下を治めよ）が下ったことを示している。ところで第4句「其の命は維新たり（其命維新）」は、明治維新の出典（出所）になっている。維新の大改革は、古代中国における周の天下統一と同様の、偉業と考えられてきたわけである。このように、思いがけない所にも漢文の影響が見られるのである。

さて口語訳・コメントは教材プリントには記さず、教師が言ったことを書き取らせる。「手を動かす」ことが学習の活性化につながると思うからである。また、教師が言った口語訳は唯一絶対のものではなく、意味が合ってさえいれば、自分の好きな表現法・文体を用いてよいと教えている。

次には同じく『詩経』の「鹿鳴」という詩の1節を見てみよう。（以下、原文・書き下

し文・口語訳という注記は省略する。)

呦呦鹿鳴、食野之苹。我有嘉賓、鼓瑟鼓笙。

呦呦たる鹿鳴、野の苹を食らう。我に嘉賓有り、瑟を鼓して笙を鼓す。

鹿が鳴いて、野原のヨモギを食べている。良きお客様を、琴や笛で楽しませる。

古代において鹿は、神の使いとされていた。鹿が鳴くというのは、神に祝福された、ありがたいことである。その感謝の念が、宴会のお客様を大切にしようという気持ちにつながっている。さてこの詩は、明治16年(1883年)に外国の賓客をもてなすために建てられた〇〇館の出典になっている。「何という建物か?」と学生に聞くと、「分かりません」と答える者が多いが、たまには「鹿鳴館」と正解できる学生もいる。このようにして、かつての日本では、漢文が大きな影響力を持っていたことを学ばせている。

次には『論語』の文章を紹介しよう。孔子が弟子たちに『詩経』を学ぶ意義を説いた箇所である。

子曰、小子何莫学夫詩。詩可以興、可以觀、可以群、可以怨。

子曰く、小子何ぞ夫の詩を学ぶ莫きや。詩は以て興す可く、以て観る可く、以て群す可く、以て怨む可し。

先生が言った。「君たちはどうして『詩経』を勉強しないのかね? 『詩経』で奮い立てるし、物事が見えてくるし、社会生活ができるし、嘆きも表現できる。」

ここで孔子は『詩経』を学ぶことは単に文学的な意義だけでなく、判断力や表現力やコミュニケーション力の育成にも役に立つことを述べている。孔子の教え(儒教)が目指すのは、良きリーダーの育成であった。リーダーが備えるべきそれらの能力を向上させるには『詩経』が大いに有益である、と説いているわけである。

さて儒教において『詩経』はこのように重要な書物であったのだが、弟子たちは一生懸命『詩経』を勉強していたのだろうか。もしそうならば、孔子がわざわざ「小子何ぞ夫の詩を学ぶ莫きや(君たちはどうして『詩経』を勉強しないのかね?)」と言うのだろうか。そう、弟子たちは『詩経』という古典文学を敬遠しがちだったのである。だからこそ孔子は「ちゃんと勉強したまえ」と苦言を呈しているわけだ。

こういう話をすれば、学生の中には「孔子の弟子たちも自分と同じだなあ」と思って親しみを感じる者もいると思う。「古典の勉強が苦手」というのは、何も今に始まったことではなく、孔子の時代(約2500年前)からすでに見られる傾向だったのである。思うに、古典を学ぶ意味の1つは「人間の不変性」に気づくことにある。大昔にも自分たちと同じ人間がちゃんと存在していた、そのような発見が古典学習にはある。『論語』は古典中の古典であり、じっくり味読すれば様々な発見ができる。しかも古本ならば、原文・書き下

し文・口語訳が併記されたものが数百円で手に入る。「できれば『論語』を買って通読してほしい」と学生に勧めている。

さて、授業では「訓読の多様性」という面にも触れておく。訓読は、中国の古文を日本の古文に直訳することであるが、直訳と言っても訳し方が100%同じになるわけではない。たとえば「子曰」の訓読は、「し いわく」「し のたまわく」「し の のたまわく」など色々ある。正解は1つではないことを強調しておく。

次に『論語』からもう1つ引用しよう。これは、おそらく孔子晩年の言葉と思われるものである。

子曰、予欲無言。子貢曰、子如不言、則小子何述焉。子曰、天何言哉。四時行焉、百物生焉。天何言哉。

子曰く、予言^{われ}う無からんと欲す。子貢^{しこう}曰く、子如^もし言^{すなわ}わざれば、則ち小子 何をか述べん。子曰く、天 何をか言^いうや。四時行き、百物生ず。天 何をか言^いうや。

先生が言った。「私は教えを説くのを止めたい。」子貢^{しこう}（孔子の弟子の1人）が言った。「先生が教えを説かなければ、私たちは何を拠^より所^{どころ}にすれば良いのですか？」先生が言った。「天が何か言っているかね？ 四季は巡り、万物が生まれてくる。天が何か言っているかね？」

ここで孔子は、小賢しい知恵に頼るがゆえに焦ったり不安になったりする弟子たちに対して、「あるがままに／なるがままに」、全てを天に任せることが大切だと言っている。その口調は、優しく柔らかい。

それから、「天が何か言っているかね？ 四季は巡り、万物が生まれてくる。天が何か言っているかね？」の原文を見ると、「天何言哉。四時行焉、百物生焉。天何言哉」となっており、全て4字句である。しかも、1句目と4句目は同一表現、2句目と3句目は対句になっている。まことに詩のような美しい表現によって、教^{きょう}え論^{ろん}しているのである。

孔子が生きたのは春秋時代という乱世で、彼自身の一生も挫折の連続であった。そういう生涯を送った孔子が晩年に到達した境地が、ここに示されていると考えるならば、「人類の希望の1つ」を見出すことができるのではないだろうか。

さて次は『莊子』の文章から引用する。

天下莫大於秋毫之末、而太山為小。莫寿乎殤子、而彭祖為夭。天地与我並生、而万物与我為一。

天下^{しゅうこう}に秋毫^{しゅうこう}の末より大なるは莫^なく、而して太山^{しこう}を小と為す。殤子^{たいざん}より寿^ななるは莫^{しょうし}く、而して彭祖^{じゅう}を夭と為す。天地と我とは並び生じ、而して万物と我とは一つと為す。

この世で一番大きいのは秋に生え変わった毛の先で、泰山は一番小さい。若死にした子ほど長命の者はなく、(700歳まで生きた) 彭祖は若死にである。天地は私と共に生まれ、万物と私は同じである。

この『莊子』の文章を、筆者が若いころ最初に読んだ時は、全く「ちんぷんかんぷん」であった。それをまず学生に白状しておく。その後、哲学・思想の概説書を何冊か読むうちに、段々と見えてきた。ここで『莊子』が言いたいのは、以下のようなことであろう。

①大きさは相対的

物には、それ自体では大小はない。もし宇宙空間に物が1つしか存在していないならば、比べる相手がないので、その物が大きいか小さいかは言えない。

②比較の始まり

比べることによって、大きさという観念が生まれる。たとえば、ふつう「山は大きく人は小さい」と考えるが、それは(無意識のうちに)山と人とを対比しているからである。もし「山と世界」を比べるならば、「山は小さく世界は大きい」となる。

③毛の先が巨大に見える時

毛の先は、ふつう微小なものとされるが、それも他の物と比較するからである。たとえば馬車や家などと比べるからである。しかし、もし更に小さい物と対比すればどうであろうか。毛の先と原子(~~『莊子』は原子の存在を推定していた)を対比してみれば、毛の先は極めて巨大な物となる。

④寿命・人生の嘆き

700歳まで生きたとされる人物彭祖も、世界と比較すれば短命である。逆に、若死にした子でも、カゲロウのような超短命な虫と比較すれば、長命と言える。このように「長さ／大きさ」は全て相対的なものであり、絶対的な基準などは存在しない。さて、「カネの多さ／頭の良さ／運の良さ」などは、それ以上に相対的なものである。相対的なことを気にして「俺は頭が悪い、運が悪い」などと嘆くのは、実に下らないことではないだろうか。

⑤万物はみな同じ

『莊子』は「天地は私と共に生まれ(天地と我とは並び生じ)」とも述べている。つまり、世界と私の寿命は同じだと言っている。これは、前述の相対性とはやや異なった角度から物事を見たものである。

世界(A)と自分(B)という対比ならば、悠久(A)と短命(B)ということになる。しかし(A)(B)を、無限大(C)と比較すればどうだろうか。(C)と比較すれば、(A)も(B)も大して変わりがなくなる。たとえば(C)の前では、(A)は1990年5月1日生まれ、(B)は1990年6月1日生まれ、その程度の違いである。つまり同年の生まれである。よって「天地は私と共に生まれ」と言える。

次に、『莊子』が続けて言っている「万物と私は同じである(万物と我とは一つと為

す)」について考えてみよう。たとえば「人間／樹木／ゴキブリ」などを、ふつうは違ったものとする。しかし、「生物」という大きなレベルでは、それらは同一である。また、生物と無生物（岩／山／星など）は、ふつうの認識では異なったものだが、「存在」という大きなレベルでは同一である。つまり、万物はみな同じなのである。

このように『莊子』が唱えるのは、「こだわりをなくそう」というメッセージに他ならない。『莊子』という書物が成立したのは、紀元前4世紀から紀元前3世紀にかけてであり、時は戦国時代であった。なぜ戦国時代という乱世になったのであろうか？ それは「国々の利害の違い」という、考えてみれば小さなこだわりを拡大解釈して、抜きさしならないものと思うからである。そのような人間の愚かさに対して警鐘を鳴らしているのである。

ここで思うに、戦国時代という分裂・混乱の時代があったからこそ、心ある思想家たちは「何とかしなければ」と考え、『莊子』のような思想も生まれてきたのであろう。人間は多くの誤りを犯すけれど、一方では同時に、誤りから抜け出す知恵も備えているのである。

さて前に、授業では日本の漢詩文も教えると述べておいた。古代から20世紀の初めまで漢文は、中国のみならず東アジア全域のインテリの共通文章語であった。インテリたちは、漢文を単に「読める」だけでなく、「書ける」ことが必須の教養として求められた。その中の1つの例として、江戸時代の菅茶山（18～19世紀）の「夏日」という作品を見てみよう。なお「夏日」の「日」は、「昼間」という意味ではなく「夏」の添え字であって、「夏日」で「夏」という意味になる。

避雨行人聚樹根、楚言齐語笑喧喧。須臾雲散天将夜、各自東西南北奔。

雨を避くる行人 樹根に聚り、楚言齐語笑って喧喧たり。須臾にして雲散じ天將に夜ならんとし、各自東西南北に奔る。

旅人たちは木の下に集まって雨宿り、あちこちのお国訛りで笑いさんざめく。しばらくして雲が晴れると、もう日暮れ時、それぞれ東西南北へと急ぎ行く。

この詩の2句目「楚言齐語」の楚と齐は、本来は、中国の南方の地域と北方の地域を指す。しかし、ここでは楚言齐語の4文字で、日本国内の方言の意味に使っている。なぜかと言えば「中国のインテリが読んで分かるように」という配慮が働いているからである。前述のように漢文は、東アジア・インテリの国際共通語であった。漢文を書く際には、(中国を基準とする) グローバル・スタンダードに従って語彙を選択することが求められる。それで、日本国内の方言を表すのにも「楚言齐語」と言っているわけである。

さてこの詩は、何気ない日常生活の1コマをそのまま描いている。そして、それが歌に

なっている。作者菅茶山^{かんちやざん}が、日常生活をこよなく愛していたためであろう。そういう気持ちを持って生活を見つめるならば、至る所に、詩の題材が発見できるのである。

同時代の俳人・小林一茶の句「朝顔や 吹倒された なりでさく」にも同様の趣向が見て取れる。——昨夜は嵐だった。おかげで、鉢植えの朝顔も吹き倒されてしまった。しかしそれでも、朝顔は吹き倒されたままの姿で咲いている。思わず「朝顔よ、がんばれ！」と応援したくなりそうな情景である。これも、日常生活を愛する気持ちの表れであろう。

最後に紹介するのは、唐の文章家韓愈^{かんゆ}（8～9世紀）の「原人」の1節である。この「原人」とは、もちろん今の人類学の用語ではない。訓読すれば「人を原ぬ^{たず}」であり、つまり「人間がなすべきことを尋ね求める→人間は何をなすべきか？」という意味である。

まず断っておくと、韓愈の言う「人」とは中国人のことであり、異民族は含まない。異民族のことは「夷狄（野蛮人）」と称している。現代的視点から言えば問題のある表現だが、かつての中国においては、しばしば見られた考えである。周辺に中国をしのぐ文明が存在しなかったので、中国人はそのような中華思想を抱きがちだったのである。しかし韓愈は単なる自国第一主義を唱えているのではなく、優れた文明を有するがゆえの、中国人の責任感を説いている。では以下に引用しよう。

天道乱而日月星辰不得其行。地道乱而草木山川不得其平。人道乱而夷狄禽獸不得其情。

天道 乱れて日月星辰其の行を得ず。地道 乱れて草木山川其の平を得ず。人道 乱れて夷狄禽獸其の情を得ず。

天の道が乱れると太陽・月・星はきちんと運行できない。地の道が乱れると草木や山や川は安定できない。人の道が乱れると野蛮人・鳥・獣は落ち着けない。

ここで韓愈は、天人合一^{てんじんこういつ}（「自然界と人間界は密接な関わりがある」という伝統的な考え）に基づいて論を進め、人間界で道理が行われないと、世界は調和を失ってしまうと説いている。韓愈が最も強調したいのは3番目の「人の道が乱れると野蛮人・鳥・獣は落ち着けない（人道 乱れて夷狄禽獸其の情を得ず）」である。なかんずく、人（中国人）と夷狄（野蛮人）の関係が重視されている。

唐の時代、周辺地域の突厥・契丹・回紇・吐蕃などの異民族がしばしば侵攻してきた。韓愈は、そういう異民族の侵攻は、根本的には中国人に責任があるのであり、中国人が我が身を正すのが先決である、と考えているのである。これは、伝統的中国にあっては特筆大書すべき優れた思想であろう。

韓愈は「原人」で次のようにも述べている。

人者夷狄禽獸之主也。主而暴之、不得其為主之道矣。是故聖人一視而同仁、篤近而拳遠。

人は夷狄禽獸の主なり。主にして之を暴するは、其の主為るの道を得ず。是の故に聖人は一視にして同仁、近きを篤くして遠きを拳ぐ。

人は野蛮人・鳥・獸の指導者である。指導者でありながら暴力的に振る舞うのは、指導者としての道を失っていることになる。だから聖人は同じく思いやりの心で見、近いものを大切に、遠くへと及ぼすのである。

(鳥や獸や、なかなずく) 野蛮人への思いやりを忘れてはならない。それこそが、人類文明の指導的立場にある者の責務である。そして聖人(理想的な君主)は、近い所に居る者(中国人)を大切に、遠い所へと恩恵を及ぼしていくべきである。そのように韓愈は説いている。これは、いわゆる人類平等の考えとは違う。しかし現実問題としては、全ての人に平等に恵みを与えるのは不可能に近い。だから、まず身近な者を大切に、そこから同心円のように徐々に恵みを広げていくのが、現実的な方策となる。

この「原人(人を原ぬ)」つまり「人間は何をなすべきか?」で韓愈が説いているのは、「世界平和の実現」という使命感である。その大きな目標のために、まず必要なのは「身近な所から」という考えである。これは儒教の伝統的な考えに根ざしたものであり、韓愈は力強い筆致によって、儒教の平和主義を継承・発展させているのである。

7. 結語

以上、漢文の授業について概略を述べてきた。受講生の中で授業に熱心に取り組んでいる者は、「漢文の世界はなかなか面白い」という感想を持つようになる。むろん、漢文の読解力も着実に伸びてくる。

ではその割合はというと、受講生のうち半分くらいである。「半分」という割合が多いか少ないかは判断が難しいだろう。しかし「当初は、漢文の知識がほとんどゼロ」の学生を対象としているわけだから、一定程度の成果を上げているとも言えるだろう。もちろん、「全体的な引き上げ」には至っていないので、これからも試行錯誤を重ねつつ、より良い授業を目指していきたいと思う。

参考文献

『漢文訓読入門』(古田島洋介・湯城吉信著、明治書院、2011年)

『新訂 中国語概論』(藤堂明保・相原茂著、大修館書店、1985年)

『国語の中に於ける漢語の研究』(山田孝雄著、宝文館出版、1985年)

『日本語はいかにつくられたか?』(小池清治著、筑摩書房・ちくま学芸文庫、1996年)

『吉川幸次郎全集』第二十卷(吉川幸次郎著、筑摩書房、1975年)

『詩集伝』(朱熹著、上海古籍出版社、1958年)

- 『詩經』(白川靜著、中央公論社・中公新書、1970年)
『論語』(金谷治訳注、岩波書店・岩波文庫、1963年)
『四書集注』(朱熹著、芸文印書館、1996年)
『莊子』(鈴木修次著、清水書院、1973年)
『莊子今注今訳』(陳鼓應注訳、中華書局、1983年)
『五山文学集・江戸漢詩集』(山岸徳平校注、岩波書店・日本古典文学大系、1966年)
『新訂 一茶俳句集』(丸山一彦校注、岩波書店・岩波文庫、1990年)
『唐宋八大家文読本(一)』(星川清孝著、明治書院、1975年)
『韓昌黎文集注釈』(閻琦校注、三秦出版社、2004年)